長崎街道木屋瀬宿記念館だより

寄せ太鼓

第　6　号
平成15年7月1日発行
北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会広報部会
TEL 619－1149

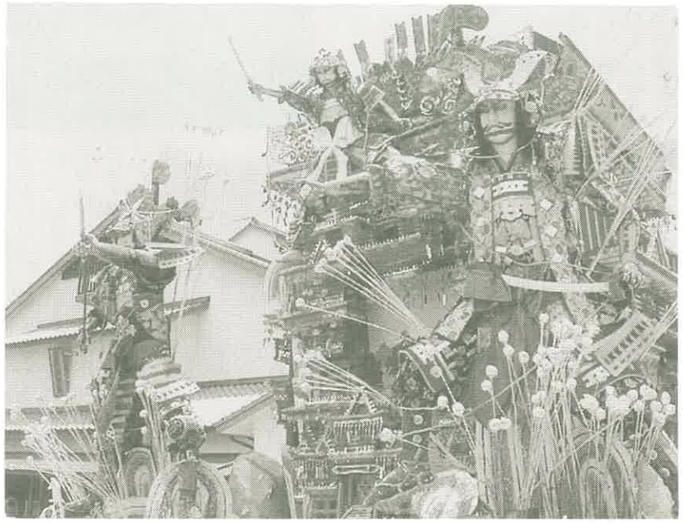
筑前木屋瀬祇園宿場祭

夏越祭
前夜祭　12日　午後6時

正　祭　13日　正　午

●奉納行事（須賀神社境内）●

- 山笠奉納　12日　午後9時
- 山笠宮入　13日　午後9時
- バンド演奏　12日　午後7時
- 宿場踊　12日　午後8時30分
- 祇園太鼓　13日　午後7時
- 民謡舞踊　13日　午後7時30分
- 獅子頭展示　12日・13日随時
- 追山笠（旧長崎街道にて）　13日　午後4時50分



木屋瀬祇園祭の由来

須賀神社 宮司　末松　公博

木屋瀬は特に種々祭事の多い町でありますが、なかでも夏の祇園祭礼は全町あげて賑わう祭事でありましょう。

そもそも須賀神社は明治３年までは「祇園社」と称されていましたが、「祇園」の名称は仏教的要素を含むとの事で明治政府の指令より明治４年全国的に改称されました。

主祭神は京都や小倉の八坂神社と同じく、諸祭神の中でも最も荒々しく勇ましい疫病退治の素戔嗚命（すさのおのみこと）並に奇稲田媛命（くしなだひめ）です。数百年以前までは氏子の疫病退治の攻撃的な祭事でしたが、時代の推移とともに「祈願」疫病除けをお願いする形式となりました。

山笠奉納行事はその祈願心を象徴する最大行事でありまして、寛永年間（１６２４）以前より明治初期迄は岩山造りで高さ９メートル余もあり量重く他村より壮丁の加勢を受けて担いでいたが、その後屋台造りとなり、更に大正の始め頃電灯線架設により高さ４メートル位に改造されました。尚、従前は６月末に夏越大祓祭が執行されていましたが、７月１２・１３日の祇園祭に日数も近いことから、当時の責任役員、岩尾四十三郎氏の発案により、合理的にと昭和３８年度より夏越大祓祭を、７月中旬に執行される祇園祭の前夜祭に併せ執行し、筑前木屋瀬祇園宿場祭として盛大にとり行われております。

『寄せ太鼓』題字について

木屋瀬では、昔から寄せ太鼓を鳴らす事が有ります。一つは毎年１２月に行う木屋瀬恵比須御座で、一番座の前に町内中の四つ角で朝の四時ごろより寄せ太鼓を鳴らし、現在も続けています。もう一つは、福岡県指定無形民俗文化財木屋瀬宿場踊り振興保存会「通称宿場踊り」も踊る前に必ず寄せ太鼓を鳴らしてから踊っています。人を集める・寄せる・伝えるという意味で、又、木屋瀬らしさを出したらどうか、と言う事で広報紙のタイトルは「寄せ太鼓」になりました。また、題字は広報委員の柴田由美子（日展の書の部門「篆刻」にて入選され、雅号は柴田青裳）さんによるものです。

（広報部会　本松　達也）

木屋瀬春席 アンケート結果

《平成15年4月13日（日）　こやのせ座》

平成15年4月13日（日）こやのせ座において木屋瀬春席を行いました。
出演者は柳亭燕路さん（落語）、太田家元九郎さん（津軽三味線）で、多くの来場者があり会場は笑いに包まれました。

《 アンケート回答：147　無回答：40　合計：187　回収率：78.6% 》

●【Ｑ１　本日はどちらから来られましたか？】
北九州市（八幡西区を除く）：18人　八幡西区：118人　鞍手郡：1人　直方市：1人　宗像市：1人　春日市：1人

●【Ｑ２　利用交通手段は何ですか？】
徒歩：45人　自家用車：79人　筑豊電鉄：22人　JR：6人　その他：2人

●【Ｑ３　この事業を何でお知りになりましたか？】
チラシ：19人　新聞：10人　ポスター：8人　回覧板：60人　その他：7人　市政だより：21人

●【Ｑ４　今回は何回目のご来館ですか？】
初めて：56人　2回目：27人　3回目：29人　4回目：34人

来場者の声

・初めて高座を体験しました。おもしろかった。宣伝をもう少ししたら良いのでは？幟をたてるなどして盛り上げる必要があるのでは、ないか。

・初めて寄せて頂きました。記念館の建物（和風、木の造り）雰囲気のステキさにうれしく思いました。落語も好きです。春の催しも折にふれて参加したいと思います。

・大変面白くて楽しい時間でした。満足させていただきました。三味線にはびっくりでした。日本一かと思うほどでした。又、聞きたいです。

みちの郷土史料館

○企画展「瓜生家展」

町並み資料館シリーズの第五弾として、木屋瀬の風情ある町並みには欠かせない「瓜生家」を取りあげます。

日　時：7月26日（土）～8月31日（日）　毎週月曜休館
9:00～17:30（入館は17時まで）
入館料：一般200円、高校生100円、小中学生50円

こやのせ座

○木屋瀬祇園宿場祭協賛事業

木屋瀬祇園宿場祭のビデオ上映、写真展を開催します。

日　時：7月12日（土）、13日（日）
10:00～19:00

木屋瀬祇園宿場祭のビデオは10:00より18:00まで1時間おきに上映します。
ビデオの上映時間は約15分です。

今後の行事予定

▼総　会　報　告▼

平成１５年４月２４日（木）こやのせ座におきまして、平成１５年度第１回北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会総会が開かれました。

規約改正、平成１４年度事業報告・決算報告、平成１５年度事業計画案・予算案、役員人事が議案として審議され、すべて承認されました。

新しい運営協議会の役員は次のとおり選任されました。

理事長	高宮　歳継
副理事長・郷土史料館運営部会長兼務	水上　裕
運営事務局長	米永　博實
広報部会長	本松　達也
広報部会理事	千々和　裕
郷土史料館運営部会理事	小河内　勝次
こやのせ座運営部会長	柴田　泰助
こやのせ座運営部会理事	今川　勝則
監事	松尾　徳康
監事	松尾　千代子

※平成１５年４月１日北九州市人事異動により、記念館の職員が変わりました。
館　長：吉富　和男　　副館長：柴田　命象

～筑前木屋瀬～ お祭りのごっつおう（ごちそう）〈その六〉

二月（きさらぎ）

初午（はじめの午の日）

○小豆ごぜん○油あげの煮メ○紅白の甘酒まんじゅう○お稲荷さんにコンカイといふ歌をあぐる。

おしゃかさまの命日（十五日）

○くろ豆と、もち米の玄を煎つち、仏様にあぐる。

三月（やよい）

ひなまつり（三日）

○菱餅・白・赤・フツ○小豆あんの白餅・フツ餅○味噌あえ・たにし・かんころ・せり・はぎな○おひら・はんぺん・青味・れんこん（又はこんにゃく）○小豆ごぜん○お神酒に桃の花を挿す。

※故岩尾四十三郎氏著書「ひろき庭」より掲載しています。

※『寄せ太鼓』は広報部会の委員が中心となって発行しています。

広報部会
部会長　本松　達也
委　員　千々和　裕、野口　靖彦
伊藤　征剛、矢野　圭樹
北崎　隆喜、柴田由美子
小河内励子

連歌師宗祇と扇天満宮　雑感

本町　野口　靖彦

一四八〇年（文明十二年）、いまから五二三年前、当時の文化の花形であった連歌師の最高峰と呼ばれていた飯尾宗祇は、西国一の大大名大内政弘（まさひろ）の招きで、山口に下向し和歌や連歌を指導して雅会を重ねた。その年の九月六日から十月二日にかけて、太宰府天満宮の参拝を目的として北九州の旅に出かけました。

宗祇はかねてより連歌の聖地である菅原道真公の霊廟に参拝する事を念願としていました。もうひとつの目的は、大内氏の依頼による対明貿易の無事と繁栄を願う住吉神社への祈願の連歌「博多千句」奉納であったと思われます。当時は連歌を神仏に奉納することで願いが叶うとの信仰があり、連歌師は神仏に願いを届ける中継ぎの役目として、大変敬われる存在でありました。宗祇はこの旅の後、紀行文「筑紫道記」（つくしみちのき）を、大内政弘に献上しました。この紀行文の特徴は、和歌はもちろんですが、発句を独立させて多数掲載しています。宗祇が俳諧の祖師と呼ばれるのは、この書に縁るところが多いと思われます。

○九月十三日　下関より小倉の沖を航行中に詠んだ句

花ならむ真砂もきくの浜路かな

（小倉の企救の砂浜の風情を菊にかけて）

若松での麻生氏の接待の謝辞として名やおもふこよい時雨ぬ秋の月

（晩秋で時雨も来てよい時期になんと良い月であろう「後の名月」を讃え麻生氏への謝意）

○九月十四日　木屋瀬着　守護代陶弘詮（すえひろあき）の館での作

ひろくみよ民の草葉の秋のはな

（この国の守護代なれば、民百姓は、もちろん万物を愛すべし、この歌は教訓的な色彩が強いが、しかし当時の木屋瀬の広大な秋の風情が感じられる）

その年、宗祇は六十才の還暦、守護代は若くて二十代であった。木屋瀬では、禅寺や館でのもてなしで大変楽しかったようです。

○九月十八日　太宰府天満宮に参拝しました。木屋瀬に滞在中に宗祇は不思議な夢を見ました。暁けがた近く男天神と名乗る者が夢に現れ扇を賜るところで目が醒めました。ところが、太宰府に参拝しましたところ夢のお告げのように、郡の司である深野筑前守より扇を賜った。これも神様のおかげであろうと感激して書き残しています。

その後、木屋瀬の天神様を里の人達は扇天神とか扇天満宮と呼んで崇拝するようになりました。この事由を江戸時代の国学者、伊藤常足が書いた碑文が現在も扇天満宮にあります。

木屋瀬は、五〇〇年も前から雅びな連歌の会が催されるような、すばらしい文化都市でありました。発句はその後俳句として独立した文芸となりました。俳句の聖と言われた芭蕉は、大変宗祇を崇拝していました。芭蕉の辞世の句の夢は木屋瀬であったかもしれません。時は移り平成の世になり、遠賀川の水は絶えることなく流れていますが常に新しく、もとの水ではありません。時の流れもまた、水、とおなじ。人もまた一人来て一人去る。動かざるものは、土手に鎮座する大銀杏。

夏草の陶（すえ）の館や宗祇の碑

千年の銀杏舞い散る天満宮　靖彦

扇天満宮祭　学神祭

五月二十五日（日）木屋瀬の伝統行事であります「扇天満宮祭」「学神祭」が、執り行われました。前夜からの雨の予報で心配しましたが、当日は風は強く吹きましたが、雨にはならず幸いでした。

今年の学神祭の参加者の新一年生は二十五名。「学問の神様」菅原道真公を祭神とする扇天満宮に、木屋瀬の昔からの習わしで、それぞれが男子が「うし」女子が「うめ」の毛筆で書き、神殿に奉納掲示しました。神殿を囲む幕は四十年前の学神祭に奉納された方々の名前入りの幕、そのなかで厳かに式典が執行されました。式典終了後は記念の植樹が行われ、父兄や地域の人達、みんなで、この子供達が立派な大人になってほしいと祈願しました。午後七時からは正祭が執行されました。

祭礼後の直会では木屋瀬の文化や歴史、子供たちの将来の事など語りあって、夜の更けるまで談笑しました。このようにして、今年も無事に伝統行事である、扇天満宮祭がお開きとなりました。本年度の当番町は本町町内会でした。（野口）

木屋瀬宿記念館の利用状況

平成13年1月1日に開館して以来、多くの人に利用していただいています。
平成14年4月～平成15年3月までの利用状況は次のとおりです。

	みちの郷土史料館	こやのせ座		みちの郷土史料館	こやのせ座		みちの郷土史料館	こやのせ座
平成14年 4月	797	1,065	8月	815	1,890	12月	266	650
5月	1,065	1,045	9月	704	970	平成15年 1月	521	585
6月	604	1,010	10月	1,068	1,205	2月	613	950
7月	631	1,235	11月	1,288	1,405	3月	820	230
						合計	9,192	12,240

（単位:人）

住所別来場者数（平成１４年度アンケート結果から）

◇門司区　4.4％　◇小倉北区　5.4％　◇小倉南区　3.4％　◇若松区　4.4％　◇八幡東区　5.4％
◇八幡西区　29.8％　◇戸畑区　1.5％　◇福岡市　8.8％　◇遠賀郡　5.8％　◇宗像市　3.9％

「史跡“西構口”短見」

みちの郷土史料保存会　会長　水上　裕

（史跡構口）

直方・飯塚に向けて出入りする感田町外れに、西構口遺構の石組みが坐っている。放置されて石組みも崩壊寸前であった昭和六十三年と平成元年の二度、「木屋瀬文化財保存委員会」委員長安川常雄氏外有志の名で「保存を訴える」陳情書を市に出したことから、平成九年発掘調査、平成十年「市指定文化財（史跡）」として指定されたものである。

指定理由は「市内に残る唯一の遺例として近世交通史上貴重な文化財」であった。福岡藩でも現存は、山家と青柳との三ヶ所である。

奥村玉蘭画「筑前名所図絵」や、麻生東谷画「木屋瀬宿之図絵馬」、昭和四年の県史跡調査報告や発掘調査を含めて、石垣の上が白練塀、その上が瓦屋根で、街道に垂直に、左右袖石垣であったことになる。古老の話によれば、屋根瓦が落ちかけ、手を伸ばして収めたという。

（構口とは）

●藩政時代、福岡藩の宿駅や準ずる所に設けられた宿駅の出入口の標である。

●長州藩の吉田松陰が長崎に行くのに嘉永三（一八五〇）年八月三十日木屋瀬を通り、六宿で見る構口を珍しがっている（西遊日記）のは、長州にないということである。又福岡藩の「諸通執行之定」中に、長崎奉行や諸大名の行列を送迎する時、上下を着て構口に坐るように指示されているのも、この構口は福岡藩独特のものだったと思われる。

●黒崎方面の東構口（現存しない）までの八五七米が宿場内で、両構口の名称が方位が南北なのに「東・西」なのは、京都に対しての上り下りのためと思われるが、六宿は殆んどが「東・西」である。

●東構口は、最近まで「新地町公民館」であった方の屋敷内の発掘調査が、平成十三年三月と平成十五年五月との二度行われ、「宿之図絵馬」通り、外側にL字の塀の組石が見つかっている。

●福岡藩では十八ヶ所近くあったと推定されている。

（関番所）

●構口には門扉があり、その横の番屋人が「明六ツ」「暮六ツ」に開け閉めしていたという人がいるが、これはオカシい。いかにも関所まがいである。重い門扉があったとすれば、支える大きな柱が立っていて、それを支える礎石がある筈であるが、その点発掘調査でも念を入れてもらったが、それはなかった。幕府直轄の「関所」に対し、藩直轄は「関番所（口留番所）」と言い、福岡藩の関番所は江戸時代当初三ヶ所であったが、不穏な幕末浪人対策等で五ヶ所増になった元治元（一八六四）年に木屋瀬にも置かれたけれど、明治一年までの僅か五カ年であり、番屋も興玉社下の河川敷近くで、代官の下役である三人の「下代」が交代で詰めていた実体もある。

●更にいうならば、「こやのせ」は「木屋ノ関」からという地名考も、「群書類聚本」中の宗祇作「筑紫道ノ記」の誤写からで、構口にまで誤解が及んでいるようでオカシなことと思っている。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

第二回木屋瀬芸術祭によせて

こやのせ座運営部会長　柴田　泰助

木屋瀬宿記念館運営協議会では、郷土の歴史と文化を活かした町づくり推進の一環事業として、「第二回木屋瀬芸術祭」を五月の二日～五日にかけて開催いたしました。

内容につきましては、二日の前夜祭「軽音楽とダンスの夕べ」では百名に及ぶ参加者が生バンドによるダンス音楽と華麗なステップを楽しみました。

三日には「真砂秀朗コンサート」（のーてい す協賛）が行われ、四日午前中の記念講演「筑前木屋瀬八幡伝説・伊藤小左衛門・其の弐」では、伊藤小左衛門研究の一人者である武野要子兵庫大学教授に郷土の生んだ伊藤小左衛門の実像に迫る講義いただき、午後の《長崎街道筑前六宿シンポジウム》「オンリーワンをめざす町づくりII」では、筑前六宿より夫々一名とジャーナリストの方々三名の九名をパネラーに迎え、熱意ある討論の中から、筑前六宿間の文化と町づくりの交流と連携の一歩を踏み出しました。

五日は、黒田藩が筑前入国以来、今に伝えられる鎮火祭火魔封火打釘の秘儀と伝承品を平田宗史福教大名誉教授に紹介いただき、続いて、黒田藩伝武道の演武を宮瀬昇三門下、筑前塾の皆様に披露いただきました。

また、みちの郷土史料館では、「岩尾四十三郎特設展」が開かれ、こやのせ座運営部会によって「町並みスケッチ大会」や「バザー」を行い、「宿場朝市」や「抹茶席」「王樹忌句会」などの協賛もいただきました。

二回目を迎え、まだまだ未熟な「木屋瀬芸術祭」ですが、郷土の歴史と文化を活かした「オンリーワンをめざす町づくり」をテーマに、今後も取組んで参る所存でございますのでご協力の程、宜しくお願い申し上げます。

わたしの昔話

国際児童年に寄せて　その二

木屋瀬町部の町の中の電線にとまっている雀をトリモチを塗った竹竿で捕る名人がいた。竹竿は魚釣り竿のように立派な物であり、トリモチも五十センチ位塗ってあった。雀が向こうの方を向いていたり、横を向いているのは狙わないで、自分と真正面に向き合いになっている雀を狙うのである。狙う機を得たこの雀捕りの名人は、竿を雀の目の前に突き出すようにさし上げるのである。竿が雀に届かない場合でも、狙えば竿の手を放って素早く投げ上げていた。同時に雀も飛び立つ、これが一瞬空間での出会いのようにさえ見えて、雀はトリモチに張りついている。実に名人技であった。この人は雀が三羽捕れると焼酎に替えて呑み、再び雀を求め町へ。雀はそこにもここにもいたが、狙える雀は少なくないようであった。但し狙えば必ず捕るという自信を持った名人であった。

木屋瀬大川にも多くの魚がいて、これを漁る人々の中にも優れた技をもつ人がいた。夕景の流れに立ってハエを釣る人の姿は、静かに絵のようでもあったが、一瞬の魚のさわりに神経を集中して釣り上げる熟練した技が必要であった。いろいろと漁法はあったが、投網での漁りはかなり難しいようであった。水面に瀬を立てて川を上る魚の群れを見付けてこれを追う時なぞ、投網を肩に浅瀬の中を水音を立てないように爪立ちて走り、魚群に追いつき投網を打ちかける、大きく開いた網は狂いなく魚群を捕えている。こんな男らしくて勇ましい動きの中での漁法の出来る人は、木屋瀬大川の漁り人達の中でも屈指の名人であった。

～次号に続く

※故柴田豊廣氏の著作より引用しました。